

# **香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 12**

**—平成11年度—**

2000. 3

**香芝市教育委員会**

原色図版 1 尼寺廃寺南遺跡（1）



全景（南から）

原色図版2 尼寺廃寺南遺跡（2）



E・F-8区遺構分布（東から）



SE-02井戸枠第1・第2段目（北東から）

## 序 文

本市は、奈良県の北西部・奈良盆地の西端に位置し、奈良時代の『万葉集』にもうたわれた二上山を背に市域が広がっています。

大阪都市圏に近接する地理的条件から、現在63,000人を超える人口を擁するベッドタウンとして発展していく、今もなお人口増加の一途をたどっています。

その反面、古くからの自然環境に恵まれ、また現在まで受け継がれてきた埋蔵文化財をはじめ、各種の文化財が数多く残されています。先史時代の人々が利用してきた貴重な資源のサヌカイト原石が大量に採れることから、石器製作遺跡が多数発見されています。この二上山北麓遺跡群、および飛鳥時代から奈良時代にかけて建立された古代寺院の尼寺庵寺跡は学界でも夙に知られているところです。

このたび、平成11年度に実施した民間・公共開発事業に伴う発掘調査結果を取りまとめ、その概要報告書を発刊することになりました。

この発掘調査を実施するにあたりまして、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、この調査概報が多くの方々の目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸甚に存じます。

また、今後とも埋蔵文化財行政に邁進していく所存ですので、関係各位のよきいっそうのご指導、ご協力をお願いする次第です。

平成12年3月

香芝市教育委員会

教育長 百済成之

## 例　　言

- 1 本書は、奈良県香芝市尼寺2丁目に所在する尼寺廃寺南遺跡の尼寺廃寺跡第15次発掘調査、同市穴虫小字ニト山に所在する鶴峯莊第2地点遺跡第3次発掘調査、同市磯壁に所在する磯壁遺跡第1次発掘調査、同市別所に所在する別所石塚古墳第4次発掘調査、同市逢坂に所在する逢坂城跡第2次発掘調査、同市北今市～逢坂に所在する遺物散布地第2次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、平成11年度の民間開発事業および公共事業に伴う事前調査として実施した。
- 3 尼寺廃寺跡第15次発掘調査の空中写真撮影、基準点測量、航空写真地形測量は、株式会社アイシーへ委託した。
- 4 尼寺廃寺跡第15次発掘調査においては、下記の方々からご指導、ご教示を賜った。心よりお礼申し上げる。(順不同・敬称略)

森 郁夫(帝塚山大学人文科学部)

大脇 潔(近畿大学学芸学部)

猪熊兼勝(京都橘女子大学文学部)

泉森 皎・西藤清秀・青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所)

## 目 次

序文 .....	(百濟成之)
I 尼寺廃寺南遺跡—尼寺廃寺跡第15次調査— .....	1
1 はじめに .....	1
2 調査の概要 .....	1
3 調査の成果 .....	5
II 鶴峯荘第2地点遺跡—第3次調査— .....	7
1 はじめに .....	7
2 調査の概要 .....	7
3 調査の結果 .....	8
III 磯壁遺跡—第1次調査— .....	9
1 はじめに .....	9
2 調査の概要 .....	9
3 調査の結果 .....	10
IV 別所石塚古墳—第4次調査— .....	11
1 はじめに .....	11
2 調査の概要 .....	11
3 調査の結果 .....	12
V 逢坂城跡—第2次調査— .....	13
1 はじめに .....	13
2 調査の概要 .....	13
3 調査の結果 .....	13
VI 遺物散布地—第2次調査— .....	15
1 はじめに .....	15
2 調査の概要 .....	15
3 調査の結果 .....	16

## 挿 図 目 次

図1 平成11年度発掘調査位置 .....	iv
図2 調査位置 .....	1
図3 調査範囲 .....	2
図4 遺構分布 .....	(折込) 3・4
図5 調査位置 .....	7
図6 出土遺物 .....	8
図7 調査位置 .....	9
図8 出土石器 .....	9
図9 調査位置 .....	12
図10 調査位置 .....	14
図11 調査位置 .....	16

## 図版目次

- 原色図版1 尼寺庵寺南遺跡(1) 全景(南から)
- 原色図版2 尼寺庵寺南遺跡(2) E・F-8区遺構分布(東から)/SE-02井戸枠第1・第2段目(北東から)
- 図版1 尼寺庵寺南遺跡(1) 遺跡全景垂直写真
- 図版2 尼寺庵寺南遺跡(2) 調査前景観/Eトレンチ全景/Fトレンチ土器埋設土坑/同上近景
- 図版3 尼寺庵寺南遺跡(3) SE-01断ち割り状態/SE-01全景/SE-01井戸枠内土器出土状態
- 図版4 尼寺庵寺南遺跡(4) SE-02全景/SE-02断ち割り状態/SE-02井戸枠上部/SE-02井戸枠下底部/SE-02最下部上層器出土状態
- 図版5 尼寺庵寺南遺跡(5) SE-04全景/SE-04完掘状態/SE-05検出状態/SE-05完掘状態/SE-07全景/SE-07断ち割り状態/SE-07遺物出土状態/SE-07井戸枠(曲物)内下底
- 図版6 尼寺庵寺南遺跡(6) SE-06全景/SE-06検出状態/SE-06井戸枠細部/SE-06井戸枠細部/SE-06井戸枠細部
- 図版7 尼寺庵寺南遺跡(7) C-1・2区建物柱穴断ち割り状態/同上a柱穴断面/同上b柱穴断面/同上c柱穴断面/同上d柱穴断面/同上e柱穴断面/C-4・5区遺構検出状態
- 図版8 尼寺庵寺南遺跡(8) F-1区柱根部に納めた土器/同左近景/E-1区焼けた凝灰岩片が出土した柱穴/D-2区凝灰岩設置柱穴/E-2区平瓦による柱支え/D-2区軒平瓦による柱支え/D-8区礎板設置柱穴/F-8区柱穴完掘状態
- 図版9 尼寺庵寺南遺跡(9) H-7区土器埋設土坑断ち割り状態/H-7区土器埋設土坑/D-8区漆塗盆出土土坑/同左近景/E・F-8区建物跡群
- 図版10 尼寺庵寺南遺跡(10) D-2区SK-04遺物出土状態/D-2区SE-03/D-1区SK-01/C-2区SK-05/同左埋土断面
- 図版11 鶴峯荘第2地点遺跡 調査区全景/調査トレンチ/地層断面/地層断面
- 図版12 磯壁遺跡 調査前景観/調査トレンチ全景/トレンチ西壁地層断面/トレンチ西壁地層断面
- 図版13 別所石塚古墳 第2調査区全景(北から)/第1調査区全景(北西から)
- 図版14 逢坂城跡 調査区全景(北から)/調査区全景(南から)
- 図版15 遺物散布地 第1調査区全景(南から)/第3調査区全景(南から)

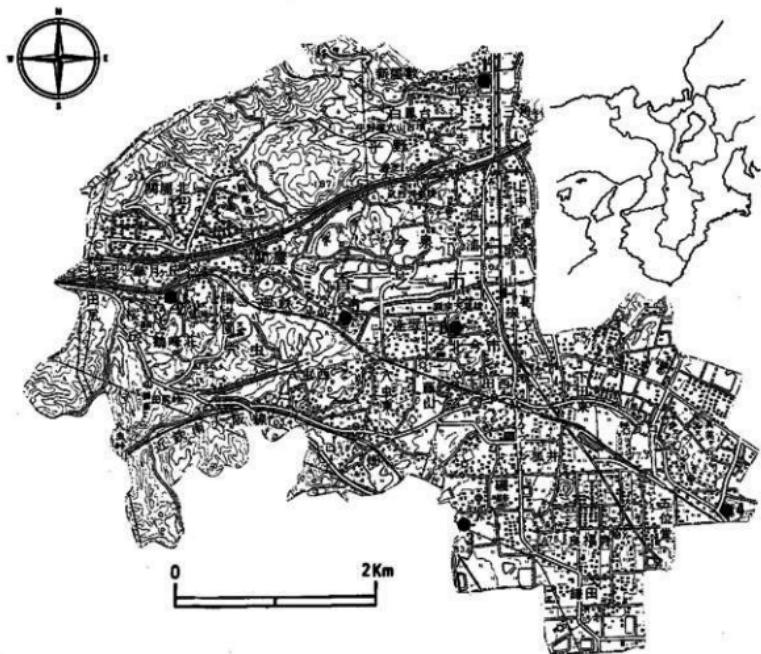


図1 平成11年度発掘調査位置 (●印)

No	遺跡名	調査次数	調査地番	調査期間	調査面積
1	尼寺庵寺南遺跡	第15次	尼寺2丁目261ほか12筆	平成11年8月5日～平成12年2月23日	3,650m <sup>2</sup>
2	鶴峯荘第2地点遺跡	第3次	穴虫3073-6・7・8	平成11年6月5日～平成11年7月9日	32m <sup>2</sup>
3	磯壁遺跡	第1次	磯壁5丁目742-1	平成11年5月20日～平成11年5月21日	16m <sup>2</sup>
4	別所石塚古墳	第4次	別所94-1ほか12筆	平成11年7月8日	50m <sup>2</sup>
5	逢坂城跡	第2次	穴虫855ほか7筆	平成11年8月6日	30m <sup>2</sup>
6	遺跡散布地 (遺跡名未命名)	第2次	北今市5・6丁目、 逢坂4・7丁目60筆	平成11年8月26日～平成11年10月28日	60m <sup>2</sup>

## I 尼寺廃寺南遺跡－尼寺廃寺跡第15次調査－

### 1はじめに

尼寺廃寺南遺跡は、奈良県香芝市尼寺2丁目に所在する奈良時代を中心とした古代寺院に関連する遺跡と目されている。伽藍配置が推定できた尼寺北廃寺（旧遺跡名：尼寺廃寺北遺跡）に対して、南遺跡は伽藍あるいは寺域を画する築地の遺構は今のところ検出されていない。また、尼寺北廃寺とは第5・6次調査（香芝市教委 1995）の結果、谷を隔てて独立することが判明しており、両遺跡の関係は未だ判然としない。

調査次数は南北の遺跡を尼寺廃寺跡として一体に数えており、1991年度の尼寺北廃寺第1次調査（香芝市教委 1992）を皮切りに、今回は第15次調査にあたる。なお、今回の調査対象面積（開発面積）は8,985.59m<sup>2</sup>で、尼寺廃寺跡においてはこれまで最も広大な面積の調査である。また、今回の調査地の北隣接地における第2・3次調査（香芝市教委 1994）で掘立柱建物や井戸、中世の溝などの遺構が検出されており、今回はそれらの遺構の連続する広がりが予想された。

### 2 調査の概要

今回の発掘調査は、店舗建設のため平成11年3月3日づけで埋蔵文化財発掘届出書が提出されたことに始まる。本教育委員会は同年3月11日づけで同届出書を奈良県教育委員会へ副申し、同年4月12日づけで「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知があった。そして、同年8月4日づけで文化財保護法第98条の2第1項の規定による通知をおこなった。事業者との協議により現地調査は8月5日に開始し、翌12年2月23日に終了した。実働日数は156日間である。

対象範囲が広大であることから、まず試掘調査を実施し、幅4mのトレンチを6本設定した。総延長334m、総面積1,336m<sup>2</sup>で開発面積の約15%を占める。試掘調査の結果、すべてのトレンチにおいて掘立柱の柱穴、井戸、土坑、溝などの遺構が検出され、開発範囲全域に遺構が分布することが判明した。なお、開発範囲の北西部は1~1.5mほど高くなっ



図2 調査位置  
(Noは調査次数を示す。第15次調査の網部は開発範囲を示す。)

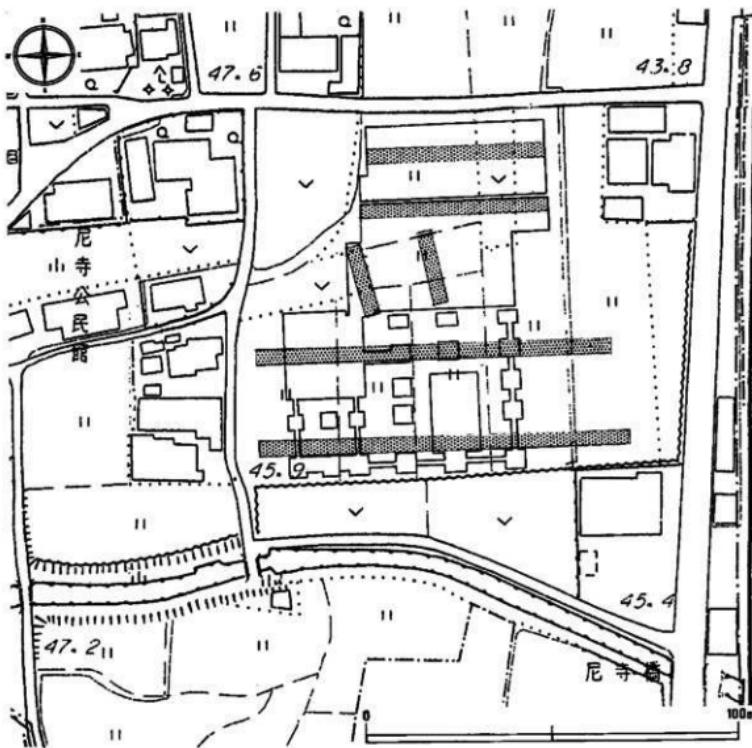


図3 調査範囲（実線範囲。網部は試掘調査トレンチを示す。）

ており、矩形を呈する現畑地水田の区画がみえることから寺域を画する築地遺構の検出が期待されたが、試掘調査では検出できなかった。また、同じく期待された古代道（通称「太子葬送の道」、岡本 1987）の痕跡を示す遺構も検出されなかった。試掘調査は8月5日～同月7日にトレンチを設定、8月18日から掘削を始め、9月8日には開発範囲の北東部から本調査の掘削を開始していった。試掘トレンチ内で検出した遺構は平面プランのみ確認しただけで、個別の調査はおこなっていない。

本調査は、北半部をほぼ全域、南半部は事業者との協議のうえ調査期間の延長等をはかることができなかつたため、店舗建物の基礎ベースおよび梁部分の遺構が破壊されるところのみを調査した。なお、開発範囲の東部は盛土工法による駐車場設置がなされる予定である。開発範囲に対する調査面積（3,650m<sup>2</sup>）は約41%である。よって、今回の未調査地は今後開発事業による現状変更の状況によっては発掘調査を必要とする。



図4 洗勝分布  
(後藤は洗濯トレーナーおよび本調査に伴う水桶等、上面プランの右側は水桶等。)

本調査で検出した遺構は、掘立柱の柱穴数千基、井戸7基、溝数条、土坑数十基がおもなものである。層位的に遺構検出面は1面であるが、遺構面を厚いところで約1mの厚さで遺物包含層が被覆しており、その出土遺物（瓦・土師器・須恵器を主体とする）から検出した遺構の帰属時期は飛鳥時代後半（7世紀後半）～奈良時代（8世紀）を中心になると推定される。ただし、北東部分は後世に削平をうけており遺物包含層が存在しない。ここには瓦器楕や土師質皿、土釜などを出土した遺構がみられ、瓦器楕は型式（川越氏による第Ⅲ段階A～C型式、近江氏によるI～5～7期に相当しようか。近江 1991、川越 1983、川越・井上 1996）から鎌倉時代（12世紀末～13世紀）のころと考えられる。よって、遺物包含層が欠落する場所には古代から中世の遺構が重複していると思われる。

本調査区の主体となる古代の遺構群は、遺物の出土量からみて飛鳥時代後半（7世紀後半）～奈良時代（8世紀）を中心とするようであるが、今後の遺物整理により遺構の時期幅は、飛鳥時代前半（7世紀前半）～平安時代初期（9世紀前半）にまでひろがる可能性もある。

柱穴は一边もしくは直径20cm～1m内外の方形、隅丸方形、円形で、柱間は1～3mほどである。柱の大きさは遺存する柱根から最大の直径は約20cmである。ただし、腐植によりやや痩せ細っているため本来はもう少し大きいと思われる（25cm～30cmほどか？）。柱穴の底部には、礎板および礎板のかわりに上面が平たい礎（なかには凝灰岩の切石もある）や小礎を配置するものが確認された。また、柱を支えるため平瓦を垂直に設置した例もある。現在数棟および数基の掘立柱建物と櫛を復元推定しているが、膨大な数の柱穴と柱穴間の著しい切り合いから頻繁な建て替えがあつたものと考えられる。掘立柱建物跡と櫛の方向は南北・東西であるが、1例のみ斜めの櫛と建物が復元できた。南北東西方向の柱穴との切り合いがなく、その先後関係は不詳である。なお、柱穴のひとつにおいて柱底から土師器壺の蓋と身がセットで埋置された状態で出土した（図版8）。また、銀環1点が出土した柱穴もある。

井戸は、検出された7基のうち1基（SE-03、直径約1.5m、深さ約1.5mの素掘り井戸）は中世に帰属する。残りの6基のうち4基は加工木材を井戸枠とする。うち最も大規模な井戸は、検出面で約4×3.5mの掘り方を有し、深さ1.5mから以深はほぼ井戸枠の大きさに掘り込む。井戸枠は遺構検出面の約-3.5mから約-1mまで組み上げているのが確認された（SE-02）。

井戸枠材は一辺約1.2m、高さ15～20cm、厚さ5～8cmで、両端をくりこみ加工して矩形に組んでいる。内法は一辺1mほどである。なお、井戸枠底からさらに下へ約1.5m矩形（一辺約1m）に掘り込んでいる。最下底には特別な構造物は設置されていない。井戸枠内から出土した土師器には文字が記されたものもある。

残りの井戸2基のうちの1基は曲物の上に白のような木製品の底を貫通させたものを乗せていい。曲物の内底には小礎を敷き並べている（SE-06・07）。

土坑はその形状、規模、埋土の状態がまちまちであるが、遺物量は鎌倉時代のものが豊富であり、一部木製品も出土した。（SK-04・05。なお、SK-05は素掘りの井戸の可能性がある。）奈良時代と目される土坑の1基から漆塗りの盆1点が出土した（SK-25）。溝は、自然流路のようなものが多く、少なくとも建物や居住区域を区画するような溝は確認されなかった。

### 3 調査の成果

今回の調査地区は尼寺庵寺跡の南東部に位置し、地形は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。検出された遺構は、掘立柱建物跡群および付随施設である。一見して大小の無作為な配置

を示す柱穴の検出状況から、尼寺廃寺南遺跡において伽藍はなくともあるいは別院のような寺院施設があった（大脇 1999）とすれば、その寺域の外にひろがる掘立柱建物跡群と考えられる。

この遺構群が寺院と関係することは、多量の瓦が出土したことから推定される。ただし、軒瓦はきわめて少量で丸瓦も少ない。出土したほとんどが平瓦で、屋瓦としての種類の比率に欠ける。しかも、その利用状況が判明した例として柱根を支えるための柱穴への転用がみられる。よって、瓦が建物の屋根に葺かれていたかどうか判然としない。出土した瓦も大半は転用瓦であろう。

今回の調査地は、第2・3次調査区を含めて尼寺廃寺跡の寺域に近接した場所に営まれた寺院の造営集団の居住区域とも想像される。なお、この調査によって尼寺廃寺南遺跡の遺跡範囲の南端がさらに南へ拡張することが判明した。

#### 引用文献

- 近江俊秀 1991 「大和型瓦器輪の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号。  
大脇 潔 1999 「尼寺廃寺考－尼寺廃寺とその周辺の古代寺院－」『瓦衣千年 森都夫先生還暦記念論文集』。  
香芝市教育委員会 1992 『平成3年度尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報』。  
香芝市教育委員会 1994 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2－平成5年度－』。  
香芝市教育委員会 1995 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報4－平成6年度－』。  
川越俊一 1983 「大和地方川土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎出版。  
川越俊一・井上和人 1996 「瓦器」『日本土器事典』雄山閣出版。

## II 鶴峯荘第2地点遺跡－第3次調査－

### 1 はじめに

鶴峯荘第2地点遺跡は、奈良県香芝市穴虫小字ニト山に所在し、サヌカイト原産地遺跡群の二上山北麓遺跡群を構成する1つである（同志社大学旧石器文化談話会編 1974）。

本遺跡は1986年に第1次調査、1989年に第2次調査が実施され、今回が第3次調査にあたる。第1・2次とも自己用専用住宅建築に伴う事前調査のため、当該年度の国庫補助金事業として実施した。第1次調査は10.5m<sup>2</sup>の調査面積で、すでに既存住宅建築の際に大規模に削平されており、現代の整地土直下に基盤を形成する大阪層群があらわれ、遺物包含層などはまったく遺存していなかった（香芝町教委 1987）。第2次では211.5m<sup>2</sup>を調査し、旧石器時代にさかのぼる良好な遺物包含層や縄文時代の土坑を検出した。前者は国府石器群で、後者は前期の北白川下層式土器片を含む土坑などである。しかし、膨大な遺物量のため基盤の大坂層群まで完掘できたのは81m<sup>2</sup>にとどまった。第2次調査地点には、良好な遺物包含層などがまだひろく遺存している（香芝町教委 1990）。

### 2 調査の概要

今回の発掘調査は、賃貸住宅建設のため平成11年2月19日づけで埋蔵文化財発掘届出書が提出されたことにはじまる。本教育委員会は同年4月5日づけで届出書を奈良県教育委員会へ副申し、同年4月20日づけで「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知があった。そして、同年5月31日づけで文化財保護法第98条の2第1項の規定による通知をおこなった。事業者との協議により現地調査は6月5日に開始し、同年7月9日に終了した。実働日数は15日間である。梅雨の時期とかさなったため、後半は雨天で発掘調査ができなかつた日が多くかった。

調査区は、開発対象範囲において任意に1辺3mのグリッドを設定した。各グリッドは地砂利および薄い表土腐層を除去したのち、地下の堆積層序を確認するため幅1mの深掘り区を設定してまずその掘削を先行させた。

地層の堆積は、地形に沿って傾斜する基盤の大坂層群（第4層）を埋めるように数十cm～1mほどの土（第2・3層）が堆積しており、その上を表土層（第1層）が被覆する。基盤上の堆積層の下部（第3層）はマンガン粒子を含むやや砂質を帯びた暗褐色土で、上部（第2層）は黄褐色シルト質土である。



図5 調査位置（1：第2次、2：第1次、3：第3次）

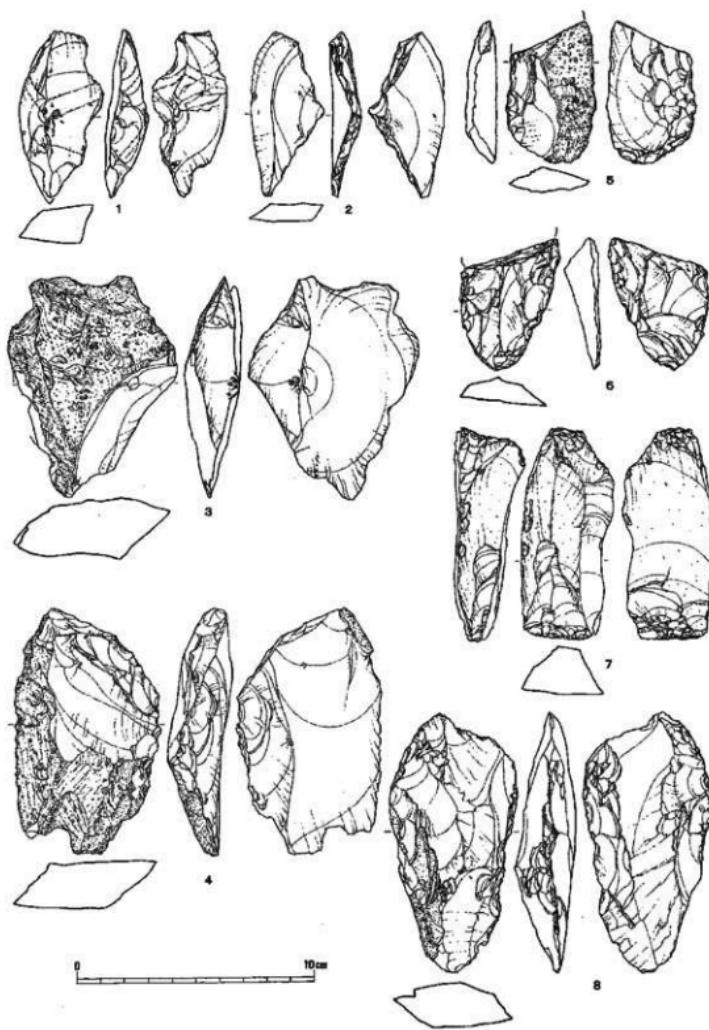


図6 出土遺物

1 翼状剥片(ファーストフレーク)、2 翼状剥片、3 整状剥片、4 翼状剥片石核、  
5・6・8 槍先形石器半成品、7 楔形石器

遺物は第2・3層から出土する。第2層からの出土がとくに多い。すべてサヌカイト製造物で、剥片、石核、碎片がほとんどであるが、わずかに盤状剥片、翼状剥片、槍先形石器未完成品、楔形石器が認められた。器面の風化度合はまちまちで、旧石器時代から弥生時代までの遺物が混在していると考えられる。以上から、第2・3層は本来の純粋な堆積層ではなく、近年の造成時の際の2次的な堆積物と思われる。

なお、図6に掲載した石製造物を以下に解説する。

1～4は瀬戸内技法関連資料で、器面の風化度合が弥生時代と推察される5・6・8の槍先形石器半成品と比較して進行しており、器面の荒れがめだつ。7の器面はより風化が進行している面とそれほどでない面の2つに分けられる。前者は図中央面の中央の剥離痕とその左側の面、そして図右面の大剥離面（本石器の素材となった剥片の主要剥離面）の3面である。これらの面ほどおりで形成する綫線はダメージを受けている。なお、上下両端の縁辺は平行でなく直交する。この楔形石器は、古い時期に作出されたやや分厚な剥片を入手して素材とした例である（風化具合からは、旧石器時代の剥片を利用した弥生時代の楔形石器か？）。

1は長さ34.8mm、現存幅71.0mm、厚さ16.3mm、現存打面幅68.6mm、打面厚16.6mm、主要剥離面長26.6mm、剥離角130°、盤状剥片の剥離角128°、末端部の縁辺角度64°を測る。このファーストフレイクの末端中央は螺旋剥離気味におわる。石理走向は主要剥離面と45°程度で交わる。2は長さ31.9mm、幅70.8mm（打面幅同じ）、厚さ9.8mm（剥離軸での厚さ7.7mm）、打面厚10.9mm（打点部では8.8mm）、主要剥離面長26.0mm、剥離角131°、末端部の縁辺角度43°を測る。3は長さ71.6mm、幅93.3mm、厚さ22.2mm、打面幅72.7mm、打面厚25.4mm、主要剥離面長50.6mm、剥離角141°を測る。4は変則的な翼状剥片石核で、盤状剥片の末端部分から翼状剥片を剥離する。素材の盤状剥片も穂面を打面とし、剥離時に半截している。長さ（奥行）64.8mm、幅103.4mm、厚さ（高さ）23.2mm、翼状剥片の推定復原剥離角133°、盤状剥片の剥離角105°を測る。5は古くに折損し、下半部のみ残る。素材剥片の主要剥離面を留める。現存長61.0mm、現存幅38.0mm、現存厚11.5mm。6も下半部のみ留めるが、折損後にその面の一部に2次加工を施す。現存長58.5mm、現存幅41.0mm、現存厚14.2mm。7は長さ89.6mm、幅38.6mm、厚さ30.9mmを測る。8は長さ110.6mm、幅55.2mm、厚さ23.9mmで、素材剥片の背面および主要剥離面を留める。

### 3 調査の結果

調査の結果、開発対象範囲のほぼ中央から北へ基盤が急激に傾斜しており、それに沿っての旧表土層の落ち込みも確認されたことから、丘陵端部に位置することが判明した。

周囲は大きく造成されており、本来の遺物包含層や遺構は確認できなかったが、今後の周辺調査によっては、遺存部を検出できるかもしれない。第2次調査地点は、本地点の南西80mほどに位置する。今後に期待したい。

### 引用文献

- 香芝町教育委員会 1987 『昭和61年度桜ヶ丘第1地点遺跡第5次発掘調査概報』。  
香芝町教育委員会 1990 『平成元年度鶴峯荘第2地点遺跡発掘調査概報』。  
同志社大学旧石器文化談話会編 1974 『ふたがみ—上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告—』学生社。

### III 磯壁遺跡－第1次調査－

#### 1はじめに

磯壁遺跡は、奈良県香芝市磯壁から同県當麻町加守にかけてひろがる縄文時代の遺跡である。本遺跡は、1937年に島本一氏によって『大和志』第4巻第3・4号へ、翌38年には松並尚夫氏によって同誌第5巻第2号に報告されたことにより学界へ知られるようになった（島本 1937 a-b、松並 1938）。1976年発行の『香芝町史』（小泉 1976）には前期・後期・晚期の縄文土器や石鎚、石匙、石棒、敲石などの石器の記述がみられる。

これまで本遺跡に対する正式な発掘調査はなされておらず、今回が第1次調査である。かつて金剛砂採掘中に縄文土器を発見した辻幸次氏の談話が『香芝町史』に掲載されている。「水田の耕土を上層にもつ表土が約五〇センチぐらいあつて、その下に一〇センチぐらいの細かい砂層と四〇センチぐらいの砂礫層があり、遺物はその下の黒褐色をした砂礫層に包含していた。」という。この字堂浦730番地～731番地は、本調査地点の東30m～50mほどの所である（図7網部b）。

#### 2 調査の概要

今回の発掘調査は、鉄塔の除去に伴う掘削のため平成11年3月12日づけで埋蔵文化財発掘届出書が提出されたことに始まる。本教育委員会は同年4月8日づけで届出書を奈良県教育委員会へ副申し、同年5月10日づけで「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知があった。そして、同年5月18日づけで文化財保護法第98条の2第1項の規定による通知をおこなった。

事業者との協議により現地調査は5月20日に開始し、同年5月21日に終了した。実働日数は2日間である。

鉄塔の除去は、一辺2mほどのコンクリート基礎4カ所をそれぞれ一辺3mほど掘削するため、発掘調査にやや支障を

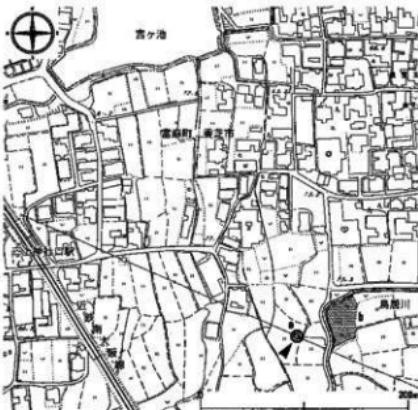


図7 調査位置(矢印a)

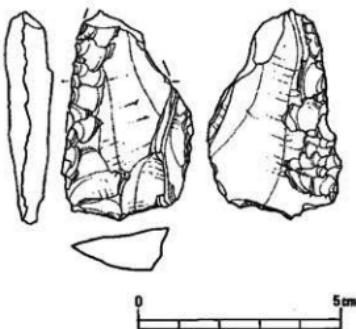


図8 出土石器

きたす（狭い）おそれが考慮されたため、鉄塔の中央をトレンチ調査した。調査区は、幅2m、延長8mの南北に長いトレンチを設定した。

表土の水田耕作土および床土（厚さ約30cm）を除去すると、厚さ20cmほどの黄褐色礫混じり土が現れる。水田造成のための整地土である。これより下位は砂層および砂礫層の互層である。現地表下130cm～180cmほど掘削した。今回の調査終了後の工事立会により現地表下約3mまでは砂礫層が続く。その下位に青灰色のシルト層がひろがるようだ。

今回の調査地においては、遺構は検出されなかった。遺物は水田耕作土および砂礫層から3点のサヌカイト製遺物および須恵器片などの土器片が出土した。いずれも原位置を離れた資料である。出土した石製遺物のうち1点は2次加工が施された削器である（図8）。器面は黒灰色を呈し、水磨を受けている。調査時の破損が著しく、全形を留めていない。素材剥片の末端縁辺に背腹両面から薄く剝離して刃部を形成している。現存長52.1mm、現存幅32.0mm、現存厚9.8mmを測る。そのほかは、小形の剥片と楔形石器が各1点である。土器片は詳細な時期が判明する資料は皆無である。

### 3 調査の結果

以上の調査の結果、本地点には遺構は認められず顕著な遺物の出土もなかった。ただ、現地表下約1mにおいて金剛砂を多量に含む砂礫層を検出した。サンプルとしていくつか回収したが、近辺でかつて金剛砂採掘が実施されていたことを実感した（船木 1994）。これらの砂層および砂礫層は南西～北東走向を示し、鳥居川の旧流路に相当しよう。

東30m～50mの「字堂浦730・731番地」から南東は微高地状を呈しており、本遺跡の中心部と予想される。今後の調査に期待される。

### 引用文献

- 小泉俊夫 1976 「先史時代」『香芝町史』香芝町役場。
- 島木 一 1937a 「大和國二上山麓—磯壁附近採集の石器ー」『大和志』第4卷第3号。
- 島木 一 1937b 「再び磯壁遺蹟に就いて—縄紋式土器の發見ー」『大和志』第4卷第4号。
- 船木利郎 1994 「地場産業の歩み・金剛砂」『ふたかみ』2、香芝市二上山博物館。
- 松並尚夫 1938 「磯壁遺蹟後報」『大和志』第5卷第2号。

## IV 別所石塚古墳—第4次調査—

### 1はじめに

別所石塚古墳は、古墳時代中期の大型前方後円墳が集中する馬見丘陵の南端部に築造された古墳である。現況では墳丘の東南部は「香芝自動車学校」の教習場となつがっているが、古墳は東南方向から西北方向へのびた丘陵の先端部に築造されており、周辺の地形測量成果などから、本来、南東方向に前方部を向けた全長90~100m前後の二段築成の前方後円墳であることが推定されている。

当古墳は、昭和45年に真美ヶ丘ニュータウンと国道165号線とを結ぶ都市計画道路の路線選定に伴い後円部の主体部が発掘調査されており、排水用のバラスを敷きつめた粘土層が検出され、出土遺物から5世紀代の古墳であることが確認された(白石・前園 1974)。この発掘調査の成果を受けて都市計画道路は当古墳を保存するために設計変更をおこない、後円部の西側(現在の位置)を通過することとなつたが、昭和46年以降の相次ぐ2件の民間開発事業により、後円部南側や前方部の墳丘推定箇所の大半が未調査のまま削平・造成されてしまった。

以後、香芝市教育委員会が都市計画道路建設に伴い平成8年8月に実施した第3次調査では、自然の丘陵を利用した地山削り出し築成による古墳であることが確認された(香芝市教育委員会 1997)ものの、依然として前方後円墳か円墳か未解決のまま古墳墳丘部は徹底的に破壊されてしまった。



図9 調査位置 (No.は調査次数を示す。)

## 2 調査の概要

今回の調査は、店舗建設のため平成11年6月3日づけで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。当地は古墳墳丘部とは離れており、過去の養鶏舎建設の際に造成されているものの、従来推定されていた古墳の周濠部に該当する可能性があるため、香芝市教育委員会が事業者側と協議をおこない、古墳の周濠の有無確認を主眼とした試掘調査を実施することとなった。

事業対象地域は、現在、駐車場や資材置場として利用されているため、墳丘箇所から周濠縁辺部まで連続して調査区を設定できることなどの調査上の制約から、比較的墳丘部に近い箇所に第1調査区（幅4m×長さ5m）を、周濠縁辺部に該当する箇所に第2調査区（幅1.5m×長さ20m）の2箇所の調査区を設定して調査を実施し、遺構を確認しだい調査面積を拡張することとした。

第1調査区は、約50cmにわたって造成に伴う客土層が厚く堆積しており、以下、現地表下約1.1mで付近一帯の基盤層である黄褐色砂質土層に至る。各層中から遺構や遺物は皆無であった。

第2調査区は、馬見丘陵の丘陵縁辺部に該当するせいか、第1調査区に比して堆積が浅く、現地表下約70cmで付近一帯の基盤層である地山の黄褐色砂質土層に至る。遺構は皆無であったが、丘陵上部から流入してきたものと推定される中世の瓦質土器や古墳時代の土師器・須恵器の破片数点が出土した。

第1・2調査区では埴輪や葺石などは皆無であり、また、周濠に由来する堆積層などもまったく認められなかったことから調査区の拡張は実施せず図面作成および記録写真撮影後、調査を終了した。

調査総面積は50m<sup>2</sup>、調査実施日は平成11年7月8日、作業期間は1日間を要した。

## 3 調査の結果

今回の調査地が別所石塚古墳の周濠が推定される箇所での始めての発掘調査であったが、古墳に伴う埴輪や周濠などはまったく検出することはできなかった。これまで古墳墳丘箇所で実施した既往の発掘調査結果からみても、少なくとも当開発事業地域内を中心とする古墳北側においては、周濠が存在する可能性は低くなかった。

現在、古墳墳丘部は過去の開発により、ほとんどすべてが遺存していないが、周濠推定箇所については古墳の北東側と南西側にわずかながらも未開発の箇所があり、周濠の有無について、今後、当該箇所における発掘調査によって最終的に判断したい。

## 引用文献

香芝市教育委員会 1997 『平成8年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報8』。

白石太一郎・前園実知雄 1974 『馬見丘陵における古墳の調査』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第29回) 奈良県教育委員会。

## V 逢坂城跡－第2次調査－

### 1 はじめに

逢坂城跡は香芝市西部の二上山北麓に位置する中世城郭推定地である。昭和50年に奈良県立橿原考古学研究所が生駒郡三郷町内で実施した立野城跡の発掘調査の際に王寺町や香芝市付近一帯で城郭関連遺構の有無確認踏査が実施され、以後、奈良県教育委員会により周知の遺跡として認知されるに至った（廣瀬 1975）。

遺跡は、二上山北麓から北東方向に派生する標高約80～90m前後の独立した低丘陵上に立地しており、この独立丘陵域のすべてが城郭跡として推定されている。

当遺跡の西方約400mの二上山北麓の別峰には岡氏累代の城郭と推定されている岡（畑）城跡が所在するのをはじめ、南方約150mにはヘ蒙ド城跡が、南東約150mには岡氏居館跡の遺跡など付近一帯を勢力基盤とした岡氏に関わる多くの城郭関連遺構が分布する（村田 1980）。

また、二上山麓付近一帯は古代の火葬墓が多く分布する地域としても知られており、当遺跡の南約150mには長文の墓誌銘が刻まれた金銅製の骨蔵器（国宝）を有する「咸奈大村墓」（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979）をはじめ、当調査地の丘陵と隣接する南西約100mの丘陵上からは複数を合葬した高山火葬墓（香芝市二上山博物館編 1994。平成10年度香芝市指定文化財）や凝灰岩製の石櫃を骨蔵器の外容器とする穴虫火葬墓（網干 1959）など、奈良時代の火葬墓が分布している。

逢坂城跡では平成11年2月～6月にかけて丘陵域の尾根筋を中心に発掘調査を実施した（第1次調



図10 調査位置 (Noは調査次数を示す。)

査)が、該期の城郭関連遺構や遺物は検出することはできなかった(香芝市二上山博物館編 2000)。

## 2 調査の概要

今回の調査は、宅地造成工事のため平成11年5月14日づけで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。当地は周知の遺跡範囲として認知されている逢坂城跡の所在する丘陵直下で、城郭に伴う周濠や関連遺構が検出される可能性があるため、香芝市教育委員会が事業者側と協議をおこない、城郭遺構の有無確認を主眼とした試掘調査を実施することとなった。

調査は、城郭推定地とされる丘陵域に近い丘陵直下に幅3m×長さ10mの調査区を1箇所設定して調査を実施し、遺構や遺物を確認しだい調査面積を拡張することとした。

調査地の基本層序は、①暗茶色砂質土層(現代耕作土層)と②黄色砂質土層(床土。層厚8cm)の2層のみで現地表下20cmで付近一帯の基盤層である③黄褐色砂質土層に至る。近・現代の耕作に伴う溝1条を検出した以外は各層中からの遺構や遺物は皆無であったことから調査区の拡張は実施せず、図面作成および記録写真撮影後、調査を終了した。

調査総面積は30m<sup>2</sup>、調査実施日は平成11年8月6日、作業期間は1日間を要した。

## 3 調査の結果

第1次調査と同様に該期の城郭関連遺構や遺物は皆無であった。また、第1次調査では丘陵直下の谷間からは比較的多くのサヌカイト製の剝片が出土したが、ここではサヌカイト製の剝片もみられなかった。

これまで実施した2次の発掘調査の結果から、当丘陵域に城郭の存在する可能性は低くなったが、城郭関連遺構の有無については、今後、丘陵周辺の発掘調査の進展によって最終的に判断したい。

## 引用文献

- 網干善教 1959 「北葛城郡香芝町穴虫火葬墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第9号、奈良県教育委員会。
- 香芝市二上山博物館編 1994 『高山火葬墓・高山石切場遺跡』香芝市教育委員会。
- 香芝市二上山博物館編 2000 『逢坂城跡第1次発掘調査報告書』香芝市・香芝市教育委員会。
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 『日本古代の墓誌』同朋舎。
- 廣瀬常雄 1975 『立野城跡-生駒郡三郷町立野所在中世城郭跡の調査概報-』奈良県立権原考古学研究所・奈良県教育委員会。
- 村田修三 1980 「奈良県」『日本城郭大系10』新人物往来社。

## VI 遺物散布地－第2次調査－

### 1 遺跡の位置と環境

当遺跡は香芝市の中央部、逢坂集落西方の丘陵約300m圏内にわたって分布すると推定されている古墳時代後期の遺物散布地である。

遺跡は、藤山丘陵の北側先端部を中心に展開しており、同丘陵の南西約100mには小規模な円墳数基からなる古墳時代後期の北今市・藤山古墳群（現在大半が消滅）や平成3年度の調査で古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物群が検出された藤山遺跡などが所在する。また、北方約100mの丘陵上には横穴式石室を有する古墳時代後期の直径約10mの円墳である山口古墳などが所在する。

当遺跡では平成10年9月に民間の宅地造成に伴い、遺構や遺物の有無確認のため試掘調査を実施したのみで（第1次調査）詳細な遺跡の範囲などは不明であるが、市内でも比較的古墳時代後期の古墳が集中して分布する藤山丘陵上に立地するため、過去に削平されて消滅した未知の埋没古墳などの検出が予想された地域である。

### 2 調査の概要

今回の発掘調査は、大和都市計画道路3・3・1号中和幹線建設工事のため平成9年12月9日づけで香芝市長から発掘通知書が提出されたことに起因する。開発計画は、現在、周知の遺跡範囲として認識されている遺跡の中央部をほぼ継続するように道路が建設されるため、地下遺構が存在した場合、地下遺構や遺物に与える影響が懸念されることから香芝市教育委員会が事業担当課である都市整備部中和幹線促進課と協議をおこない、遺跡の有無確認のための試掘調査から実施することとなつた。

現地調査は、事業対象地域の南側に第1調査区（幅2m・長さ10m）、中央部に第2調査区（幅2m・長さ10m）、北側に第3調査区（幅2m・長さ10m）

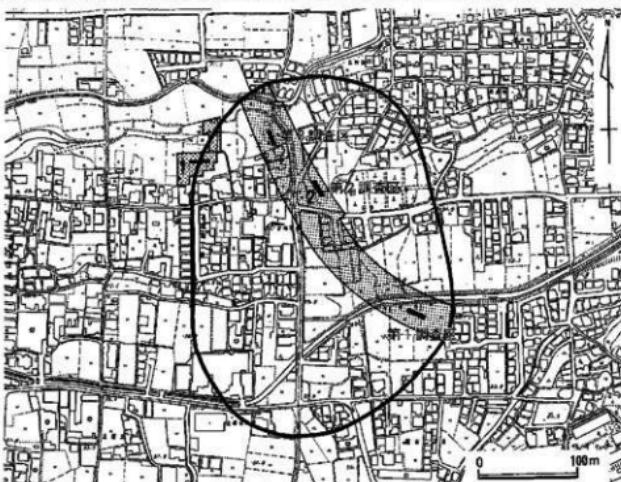


図11 調査位置 (No.1・2は調査次数を示す。)

m) の計 3箇所の試掘調査区を設定して、地下の基本層序の把握および遺構や遺物の有無確認のための試掘調査から実施することとした。

第 1 調査区の基本層序は、上から①暗茶色砂質土層〔層厚15cm〕(旧耕作土)、②黄褐色砂質土層〔層厚15cm〕(床土)、③黄褐色砂質土層〔層厚20cm〕(下層の地山土層塊混入層)となり、現地表下約50cmの下位の地点で付近一帯の基盤層である③黄褐色砂礫土層(地山)に至る。

第 2・3 調査区の基本層序は、上から①暗茶色砂質土層〔層厚5cm〕(腐葉土層)、②黄褐色砂質土層〔層厚5cm〕(下層の地山土層塊混入層)となり、現地表下約10cmの下位の地点で付近一帯の基盤層である③黄褐色砂礫土層(地山)に至る。

調査は第 1~3 調査区ともに付近の基盤層である③層(黄褐色砂礫土層)上面まで重機で掘削し、以下人力によって遺構検出作業を実施したが、遺構や遺物は皆無であった。

遺構や遺物は確認されなかったことから本調査は不要と判断し、記録保存のための図面作成および写真撮影終了後、当日中に埋め戻して試掘調査を終了した。

調査総面積は60m<sup>2</sup>、調査実施日は平成11年8月26日と同年10月28日、作業期間は2日間を要した。

### 3 調査の結果

調査区の中でも第 1・2 調査区は比較的視界の開けた丘陵の先端部に位置するため、古墳に関する何らかの遺構が検出される可能性の高い地域であったが、第 1 次調査と同様に遺構や遺物は皆無であった。現段階では遺物の分布域や遺構の有無などの遺跡の詳細は不明であるが、周辺踏査の結果からも遺物の散布は認められないことから当地に遺跡が存在する可能性は低いものと考えられる。

したがって、当遺跡の名称については今後の発掘調査の結果により改めて検討することとした。

図版1 尼寺廃寺南遺跡（1）



遺跡全景垂直写真（上が北）

図版2 尼寺廃寺南遺跡（2）



調査前景観（北東から） 後方左は二上山



E トレンチ全景（東から）



F トレンチ土器埋設土坑（北から）



同上近景（北から）

図版3 尼寺廃寺南遺跡（3）



SE-01断ち割り状態（南から）

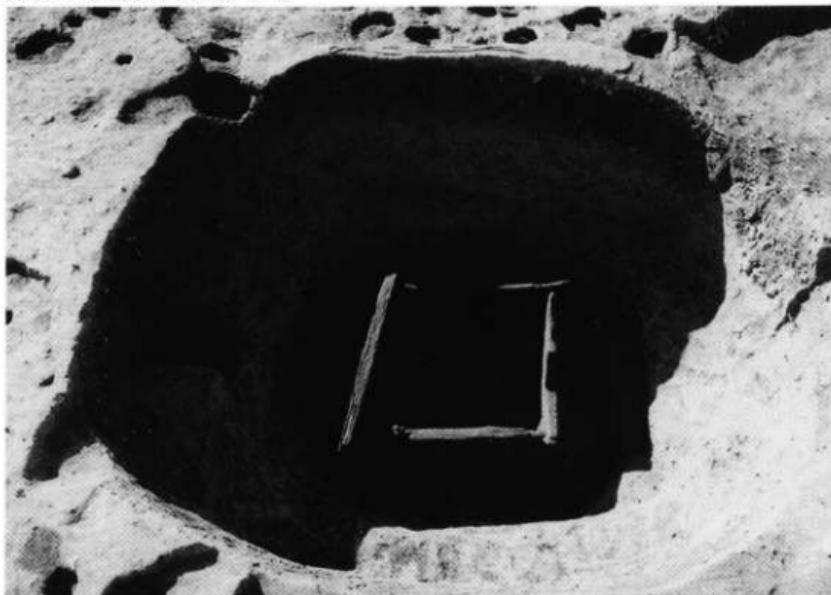


SE-01全景（南から）

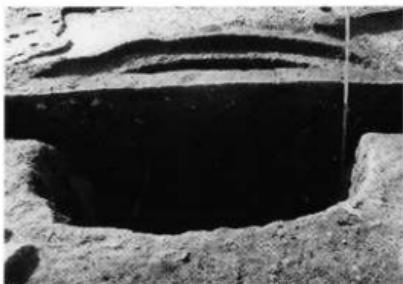


SE-01井戸枠内土師器出土状態（東から）

図版4 尼寺廃寺南遺跡（4）



SE-02全景（東から）



SE-02断ち割り状態（東から）



SE-02井戸枠下底部（西から）



SE-02井戸枠上部（東から）

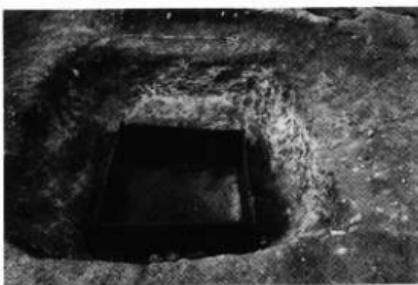


SE-02最下部土師器出土状態（北から）

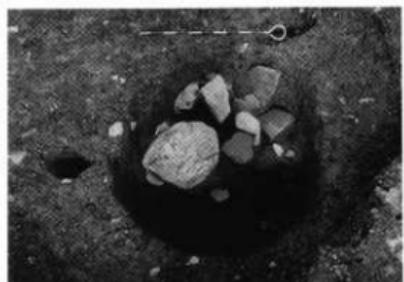
図版5 尼寺廃寺南遺跡（5）



SE-04全景（東から）



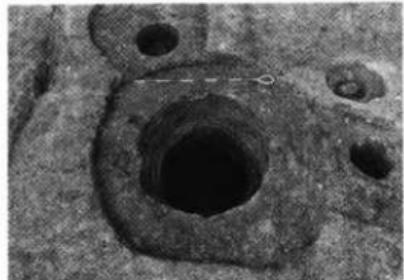
SE-04完掘状態（東から）



SE-05検出状態（南から）



SE-05完掘状態（南から）



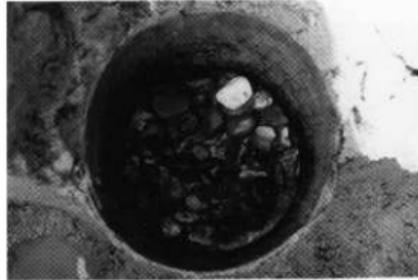
SE-07全景（南から）



SE-07断ち割り状態（南東から）



SE-07遺物出土状態（東から）



SE-07井戸枠（曲物）内下底（南から）

図版6 尼寺廃寺南遺跡（6）



SE-06全景（南から）



SE-06検出状態（南から）



SE-06井戸枠細部（南から）



SE-06井戸枠細部（南東から）

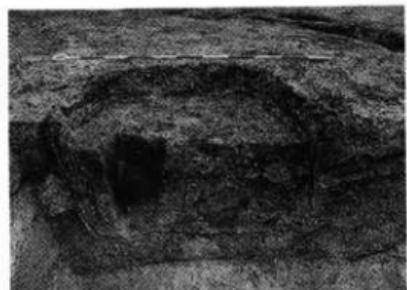


SE-06井戸枠細部（北東から）

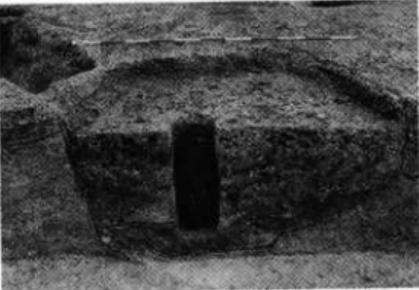
図版7 尼寺廃寺南遺跡（7）



C-1・2 区建物跡柱穴断ち割り状態（西から）



同上 a 柱穴断面（西から）



同上 b 柱穴断面（西から）



同上 c 柱穴断面（西から）



同上 d 柱穴断面（西から）



同上 e 柱穴断面（西から）



C-4・5 区造構検出状態（南から）

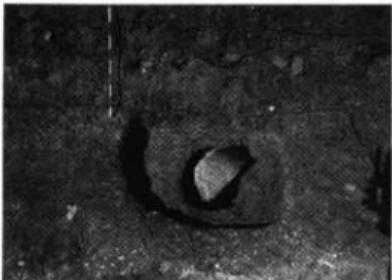
図版8 尼寺庵寺南遺跡（8）



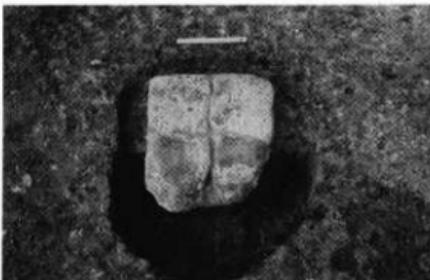
F-1 区柱根部に納めた土師器（南から）



同左近景（蓋をはずした状態。南から）



E-1 区焼けた凝灰岩片が出土した柱穴（南から）



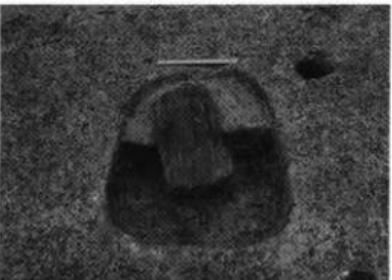
D-2 区凝灰岩設置柱穴（南から）



E-2 区平瓦による柱支え（東から）



D-2 区軒平瓦による柱支え（南西から）

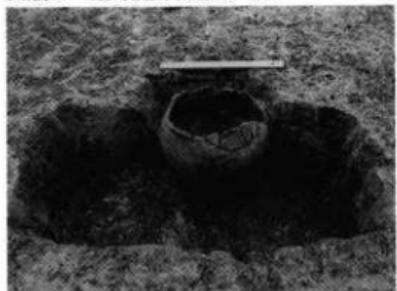


D-8 区礎板設置柱穴（東から）

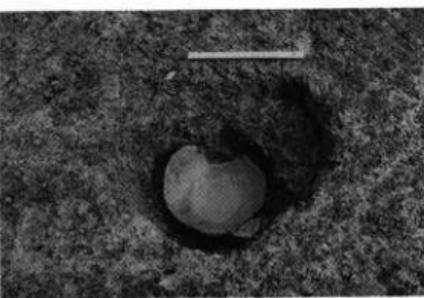


F-8 区柱穴完掘状態（東から）

図版9 尼寺廃寺南遺跡（9）



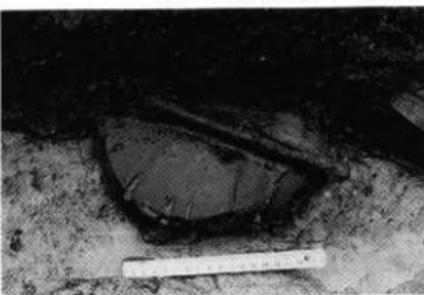
H-7区土師器埋設土坑断ち割り状態（東から）



H-7区土師器埋設土坑（南西から）



D-8区 SK-25漆塗盆出土土坑（北から）

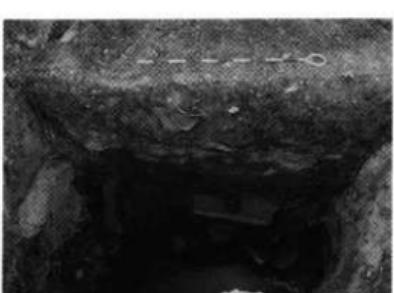


同左近景（北から）



E・F-8区建物跡群（南東から）

図版10 尼寺廃寺南遺跡 (10)



D-2区 SE-03（北から）



D-1区 SK-01（南から）



C-2区 SK-05（北から）



同左埋土断面（北から）

図版11 鶴峯荘第2地点遺跡



調査地区全景（東から）



調査トレンチ（西から）



地層断面（南西から）

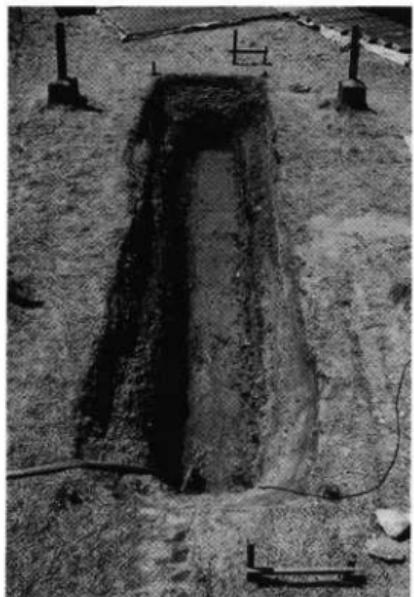


地層断面（北西から）

図版12 磯壁遺跡



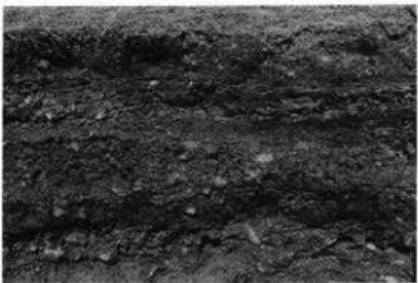
調査前景観（北東から） 後方右は二上山



調査トレンチ全景（北から）



トレンチ西壁地層断面（北東から）



トレンチ西壁地層断面（東から）

図版13 別所石塚古墳



第2調査区全景（北から）



第1調査区全景（北西から）

図版14 逢坂城跡



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

図版15 遺物散布地



第1調査区全景（南から）



第3調査区全景（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	かしばしまいぞうぶんかざいはくつちようさがいほう						
書名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報12						
副書名							
巻次							
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号	12						
編著者名	佐藤良二・下大迫幹洋						
編集機関	香芝市二上山博物館						
所在地	奈良県香芝市藤山1丁目17番17号 TEL 0745(77)1700						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° °'	° °'			
尼寺裏寺 南遺跡	香芝市 尼寺2丁目	292109	144	34°34'06"	135°42'14"	19990805～ 20000223	3,650	店舗建設
鶴峯荘第2 地点遺跡	香芝市 穴虫字ニト山	292109	17	34°32'58"	135°40'11"	19990605～ 19990709	32	共同住宅建設
礪壁遺跡	香芝市 礪壁5丁目742-1	292109	63	34°31'39"	135°42'00"	19990520～ 19990521	16	鉄塔除去
別所石塚 古墳	香芝市 別所94-1ほか	292109	82	34°31'44"	135°43'44"	19990708	50	店舗建設
達坂城跡	香芝市 穴虫855ほか	292109	56	34°32'50"	135°41'17"	19990806	30	宅地造成
遺物散布地 (遺跡名未命名)	香芝市北今市5丁 目	292109	117	34°32'43"	135°41'58"	19990826～ 19991028	60	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尼寺裏寺 南遺跡	寺院跡	飛鳥 奈良	掘立柱柱穴 井戸、溝、土坑	土師器・須恵器・瓦瓦器	寺域に隣接する掘立柱建物跡群
鶴峯荘第2 地点遺跡	生産遺跡	旧石器 弥生	なし	瀬戸内技法関連資料 槍先形石器半成品	なし
礪壁遺跡	集落跡	縄文	なし	削器	なし
別所石塚 古墳	古墳	古墳	なし	土師器・須恵器	なし
達坂城跡	城館跡	中世	なし	なし	なし
遺物散布地 (遺跡名未命名)	散布地	古墳	なし	なし	なし

---

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 12

— 平成11年度 —

2000(平成12)年3月31日

編集 香芝市二上山博物館

〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号

TEL 0745-77-1700 FAX 0745-77-1601

発行 香芝市教育委員会

〒639-0244 香芝市本町1397番地

印刷 堀内印刷株式会社

〒635-0067 大和高田市春日町1丁目9番10号

---